
friend

新夢見 勇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f r i e n d

【Nコード】

N 2 4 6 7 R

【作者名】

新夢見 勇人

【あらすじ】

大人と子供の戦争！！？？

人を殺せば100万円もらえるという一週間で

起こるさまざまな困難を、乗り越えて見える友情と愛物語。

フレンド 1話 (前書き)

初めての作品です。

フレンド 1話

くプロローグく

学生が大人に命を狙われる。

そんなことがあってもいいのだろうか。

子供を殺したい…

そう思っている愚かな大人たちがこの世にはたくさんいる。

今は西暦2511年人口約1億人。

その10%が学生だ。

6歳から18歳までの人達が約1000万人いる。

犯罪を犯すといえば精神が未熟な子供が多いのも事実だ。

そんな子供を殺したいというこの国の大人の計画だった。

今日も何気ない一日だった。

僕大宮流星は、

学校から帰ってきて郵便ポストを見ると大きな封筒があった。

中には、エアガンが4個入っていた。

何だろうと思いながらテレビをつけた。

「全国の学生に告げる。君達の家にはエアガンを送った。それを使って大人と殺し合いをしてもらう。」

どのチャンネルも全く同じだった。

明後日の午前1時から一週間後の午前1時までの期間

その期間に大人なら学生、学生なら大人を一人殺すたび100万円
国からもらえる

という内容だった。100人殺せばたった一週間で億万長者になれる。

自由参加だが、この賞金を考えれば大抵の人は参加するだろう。

それに参加していなくて命が狙われているのだから

参加せざるおえなかったのだ。

流星はそんなことあまり気にしていなかった。

翌日学校に行くとクラスの皆がこの話題で盛り上がっていた。

「流星！ 俺ら皆で一億円目指そうぜ」

と佐藤優斗が言った。

周りには斉藤寅之助、藤本亮、西野大輔、の男5人に

宮元桜、杉山菜々、山口美優の女3人がいた。

これがいつものメンバーだ。

「目指せ億万長者」と流星は大きな声で言った。

このときまだ僕はこのことを軽くしか考えていなかった。

フレンド 2話

それから家に帰った僕は、色々なことを考えた。

身近な大人。

両親であつたり、担任の先生だつたり、

そういつた人のことを考えてた。

でも殺さなきゃ殺される。

それに桜に気持ちを伝えないまま死んでしまうのが怖かつた。

桜は、明るいところもあれば、冷静なところもあつて、頭が良い。

何より優しかつた。

そんな桜が好きだつた。

そんなことを考えていたとき、

両親が帰つてきた。

「ただいまあ。」

なぜだかいつもより明るい気がした。

「みんな集まれ。」

と父が言った。

みんな集まって正座した。

父はサラリーマンなので、収入がいいわけがなかった。

「大宮家が大富豪になれるたった一度のチャンスを国がくれた。

そのチャンスを家族みんなでつかもつじゃないか」

と父は真剣に言ってきた。

母も父も運動神経はいいほうだと思う。

小5の弟も運動神経は良かった。

僕は王からの贈り物のエアガンと玉100発を家族一人ひとりに渡した。

不意に「みんな死ぬなよ。」

と父がつぶやいた。

僕は、「絶対死なない。桜も死なせない。こんなところで死ぬわけにはいかないんだ。」

と心の中で言った。

死ぬわけにはいかないんだ・・・。

フレンド 3話

あれから家族は解散した。

今晚から一週間後までの

あのエアガン戦争が始まるのだ。

エアガン戦争のルールにより、

学生は、ジャージで、

大人は、それ以外のものを身につけるということになっていた。

それ以外は何でもありのルールだった。

それに期間中は、どんな犯罪を犯しても罪は問われない。

エアガンを見てみると、カウンターらしきものがついていた。

多分大人を殺したらカウントされるのだろう。

そして僕は、集合場所の公園に向かった。

辺りは静まり返っている。

街頭の明かりが僕の体を照らしていた。

12時30分に集合だったが、僕は15分早く集合場所にたどり着いた。

すると、もうすでに僕以外のメンバーが全員そろっていた。

「どーする？」と大輔がみんなに問いかけた。

「作戦立てようぜ」寅が明るい声でいつてきた。

みんなこの戦いを楽しんでいるようだった。

僕は「今日は初日だから、様子見よう」

と言ったが、

問題はたくさんあった。一週間ずっと寝ないで戦うなんて、不可能だ。

美優が「寢床は、学校の保健室にしよう！そこなら怪我の応急処置ができるし！」

と言ってきた。

言い終わったとほぼ同時に、サイレンが鳴り響いた。

「ついに始まったか。」と優斗がつぶやいた。

この7日間の戦いが始まった。

フレンド 4話

まず僕達は、近くのコンビニに向かった。

七日間の食料を手に入れるためだ。

店の中に一人大人の店員がいた。

「どーする？」と亮がみんなに問いかけた。

「あの人殺さなきゃ中に入れないね…」と菜々が答えた。

「俺にいい案がある流星以外ちよつとみんな離れてくれ」と大輔が言った。

みんなは、僕達から離れた。

すると、「流星、あそこの影から、店員がでてきたところを撃つてくれ。」

俺が店員を誘き寄せる。」

と言った。

僕は「わかった。」といって、影へ向かった。

僕が大輔にOKサインを出した直後に、

大輔は、コンビニの窓ガラスにエアガンを2発撃った。

すると店員がエアガンを持って向かってきた。

僕には気づいていないようだ。

作戦通り、店員が外にでてきた。

僕は、エアガンの引き金を引いた。

「バーン」

僕の撃った弾は、店員の脳天を貫いていた。

店員が倒れた直後に、僕のエアガンのカウンターが

「カチ」と1とカウントされた。

僕は、100万円を手に入れたことになったが、

その喜びより、人を殺してしまったという

罪悪感が襲ってきた。

でも、生き残るためには、この罪悪感に慣れるしかなかった。

慣れるしかないんだ。

幸い店員は、一人しかいなかったため、

8人は7日分の食料と飲み物を買った物かごに入れて、

コンビニを後にした。

そして学校の保健室へ向かった。

フレンド 5話

僕達8人は、学校の保健室にたどり着いた。

学校の鍵は開いていて、

人らしき人は誰もいなかった。

保健室には、4つのベットと4つソファがあったので、

寝床も心配なかった。

そして、さっきコンビニで手に入れた

食料も冷蔵庫の中にしまった。

「100円シヨップ行かない？」

と優斗が誘ってきた。

それに菜々と寅がついていく

ということになった。

「シャワー確保したいな……」

と美優が言ったので、

亮と大輔がシャワー確保の旅にでることになった。

「じゃあ……桜と流星は留守番しててね」

と菜々が言った。

「了解。じゃあ気をつけて」

僕と桜の2人きりになった保健室。

「いいたいことがある。」

僕は桜の手を強く握り締めた。

「何？」

「桜。僕はあなたのことが好きになった。

一生一緒にいたい。だから

この戦いで1億円稼いで、この戦いで生き残って、

僕が18歳になって、桜を幸せにできるような

男になったら僕と結婚してください。」

桜は、僕と目をそらした。

「いきなりでびっくりした……」

私も流星のことが好き。だから結婚の話もいいよ！

その代わりちゃんと私を

幸せに出来る男になってからね。」

「やったあー。」

絶対幸せに出来る男になります。」

「じゃあ、この戦いが終わったら、キスしようね。」

まずは、この7日間。この7日間だ。

フレンド 6話

しばらくすると、みんな帰ってきた。

寅が「ほら、南京錠とってきた。

これで安心だな。」

「じゃあみんな寝ようぜえ……。なんか疲れたし。」

僕は、つい本音が出てしまった。

「よし、じゃあおやすみい」

と亮が言った。

朝起きると、もう8時を過ぎていた。

みんな精神的に疲れたせいなのか、

まだみんな寝ていた。

僕は、机にメモを残して学校を後にした。

家族の顔を見ておくだけでなく、

やっぱり100万円が欲しかった。

見知らぬ大人なら殺してしまっても

別にいい気がしていた。

学校から家まで歩いて30分くらいかかる

道のりの中で、いくら手に入れられるかが

一番知りたかった。

10分くらい歩いたときに、

一人大人が僕に背を向けて歩いていた。

僕にはまだ気づいていないようだったので、

後ろから撃った。

まず一人目。

と思った時、後ろから若い男3人歩いてきていた。

僕は、あわてて角を曲がった。

「やばい……。」「と一瞬頭の中でよぎった。

でも僕はこんなところで死ぬわけにはいかない。

僕は桜を幸せに出来る男になるんだ。

フレンド 7話

パンという銃声が聞こえると同時に、

僕の近くの木に小さな穴が開いた。

とその時

その男3人を後ろから2人の子供が撃っていた。

僕は何が起きたのかすぐには理解できなかった。

「大丈夫かよ!!」

と聞きなじみのある声がした。

大輔だった。

それに隣に亮がいた。

このとき僕は助かったのだと実感することができた。

そして僕は、家に着いた。

弟しかいなかったが、家族みんな無事らしい。

それから

僕達3人は、狂ったように大人を殺していった。

‘ 大人狩り ‘

というやつだ。

今日だけで2000万円手に入れた。

みなさんなら命というものを懸けて1日で2000万円

手に入ったら何しますか？

僕は、この一日で2000万円という金額よりも、

桜のためだけでなく、みんなとこの7日間を戦うことをやっと決心した。

フレンド 8話

それから僕達わ保健室へ帰って

一夜を過ごした。

2日目。

朝になって窓の外を見ると、

車から逃げている高校生らしき人が見えた。

確かに大人には、車が使える。

でもさすがにまだ中学生の僕達に

運転できる自信がなかった。

「俺達も乗り物欲しいなあー」

と大輔が言った。

自転車もいいと思ったが、

使い勝手が悪いので、

バイクということになった。

僕達8人は、歩いて20分くらい先のバイク屋へ向かった。

向かう途中一人見かけなかった。

僕は不吉な予感がした…。

まさかこの予感がまさか本当のことになるとは思っていなかった。

僕達8人はバイク屋に到着した。

店がやっていなかったの

店の窓を破壊して中に入った。

中にはかっこいいバイクがずらりと並んでいた。

今のバイクは、昔のバイクと違い、

単三の電池を何個か入れるだけで

走ることができる。

バイクを見ていて僕達は

周りを見ていなかった。

気がつくと、10人組みの大人がバイク屋の目の前にいた。

「に…逃げろ!!」

と優斗が叫んだ。

フレンド 9話

僕達は必死に逃げた。

僕の隣には桜と、寅と優斗がいた。

菜々と美優と亮と大輔は、僕達より少し後ろだった。

少し行くと交差点が現れた。

僕達は左へ逃げた。

すると、大輔たち4人は、右へ逃げた。

「しまった…。」

と思ったが、もう遅かった。

「保健室」

という亮の声が聞こえた。

僕達は、それから15分ほど走り続けた。

後ろは決して振り返らなかった。

いつもなら、15分も全力では走れないが、

やはり命の危機にさらされると、自分の持っている能力以上の

力がでてくるのだ。

「もう大丈夫だよ」

と優斗が言った。

「あいつら大丈夫かな…」

と寅が言った。

「みんな、生きて帰ってきてくれ。」

と心の中でつぶやいた。

僕達は、亮の

「保健室」

という声を信じ、保健室へ向かった。

フレンド 10話

僕は保健室にやっとの思いでたどり着いた。

そしてそのままベットに倒れこんだ。

「俺は家族を残して死ぬわけにはいかないんだあああ」

「俺には遣り残したことがたくさんあるんだ!!!」

「なのに…」

「なのに…」

「なのに…」

「殺してやる。」

「殺してやる。」

「死ね。」

「死ね!!!」

この人たちは…俺が殺した人たちだ…。

「ありがとう。」

「い…今は亮の声…。」

確かに今の夢に亮がいた。

「亮!! 亮!!」

時計を見ると11時をさしていた。

寝た時も11時くらいだったので、

一日寝たことになる。

もうこの3日目は始まっていた。

そして僕は学校をすでに飛び出していた。

フレンド 11話

結局バイク屋ではバイクを入手できなかったため、
移動手段は歩きしかなかった。

俺は一人で夜中の道を歩いていた。

夜中の道は誰もいなくて、奇妙だ。

何故かそういうところが俺は好きなのだ。

俺は何も考えず、何かにおびき出されるように
歩いていた。

住宅地の交差点。

物音もなかったのに

物音が聞こえてきた。

足音と、車のエンジン音だ。

交差点を曲がった時

まず視界に入っただのは

大輔たちだ。亮も美優も菜々もいる。

俺は満足感に浸っていた。

だがそれも一瞬だった。

亮が「逃げろ！」

と叫びながら走ってきているのだ。

すると、一台の車が俺らのほうへ

大輔たちの後ろで曲がってきた。

俺は大輔たちと合流して、

走り始めた。

何があっただか聞きたかったが、

聞ける雰囲気ではなかった。

大輔や亮の目はマジだった。

美優と菜々はおびえているような

こわばった表情をしていた。

俺はこれはヤバイなと今思った。

全力で走り続けたが、さすがに

車には勝てそうになかった。

徐々に近づいてくるような

感覚はあった。

「優斗、俺もう無理だ。」

と亮がかすれた声で言ってきた。

「ありがとう。」

と言うと、亮は逆走して車に向かっていった。

「おい、何するんだ」

といい言ったがもう亮は聞こえる範囲にはいなかった。

俺も逆走した。

すると、ものすごい銃声が響いた。

俺は反射で目を開けられなかった。

ずっと僕は祈りながら座り込んで

目を閉じていた。

すると徐々に車が離れていくのが分かった。

そこで僕は目を開いた。

そこで見えたのは倒れている亮だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2467r/>

friend

2011年10月8日19時42分発行